



問 題

問題本文

1701～1703年に発生した赤穂事件は、歌舞伎や映画などで有名な忠臣蔵のモデルとなったものだが、おおよその経過は別紙「事件概要」にあるようなものであった。これを前提として、下記のA～Dの立場に立ってそれぞれの議論を、300字以上500字以内で展開しなさい。なお答案では、「事件概要」で指定されている「甲」「乙」などの略号で人名を表記すること（「事件概要」に略号の指定のない人物についてはこの限りではない）。

- A． 時点Tにおける旧赤穂浅野家家臣の議論として、仇討ちを行うべきだ、とするもの
- B． 時点Tにおける旧赤穂浅野家家臣の議論として、仇討ちを行うべきではない、とするもの
- C． 仇討ちと処罰が行われた後になされる議論として、仇討ちの行為とそれを実行した者たちを擁護・賞賛するもの（「忠臣蔵」を歓迎し赤穂浪士たちに共感してきた庶民の感じ方を代弁するかたちのもの）
- D． 仇討ちと処罰が行われた後になされる議論として、仇討ちの行為とそれを実行した者たちを批判するもの（現在の時点に立って自分の観点から自由に論じてよい）

解答作成上の注意

上のA～Dの4つの議論は、それぞれ独立のもののみなし、独立に採点します。そのため、他の欄で書いたことでも、必要な場合には議論を繰り返して下さい。



事件概要

1701年(元禄14年)3月14日に、江戸城本丸松之廊下で播磨赤穂城主(5万3500石)浅野内匠頭長矩(以下「甲」と表記)が高家肝煎(旗本)であった吉良上野介義央(以下「乙」と表記)に突然斬りかかって傷を負わせた事件があった。この日は幕府の年賀に対する答礼のため京都から遣わされた勅使・院使に対して、將軍徳川綱吉の挨拶が白書院で行われるはずであったが、事件は勅使らの到着直前に起こった。甲は勅使の御馳走役であったが職務を放棄して事を起こしたのである。これらの条件が甲の罪を重くし、彼は即日切腹の処分を受け、浅野家は取りつぶされた。乙は儀礼担当の職にありながら甲に十分な指示を与えず、甲が恥をかくななどのことがあり、甲はそれを遺恨として乙を殺そうとしたといわれ、浅野家中をはじめ巷間ではそのうわさを信じていた。しかし幕府は浅野側の正当性はいっさい認めず一方的な犯罪として処理した。それにしてもこの処分は過酷であると世に受け取られた。浅野側の多くは、この事件をけんかのみならず、幕府の処分をけんか両成敗の原則に反するとする一方、乙をみずから手は下さなかったが結果的には甲を破滅に追い込んだ仇敵とみなした。中には、亡君の遺志を継いで乙を殺し、両成敗を完成させることで、切腹・改易の処分によって失われた浅野家の名誉を回復しようとする者たちもあった。いわゆる急進派である。それに対して家老であった大石良雄(以下「丙」と表記)は甲の弟である浅野大学によって浅野家の再興を図るとともに、乙へもなんらかの処分がなされることで浅野家の名誉回復を期待し、幕府に嘆願した。しかし1702年7月に大学が広島浅野家に御預けとなってその望みを断たれたので、丙は急進派に合流した。そのときまで浅野家の再興を望んで盟約を結んできた家臣の多くは、ここで離散した(この時点をとる)。そして12月14日に丙以下の浅野家遺臣が本所の吉良邸に乱入し、乙を殺害してその首を芝高輪にある泉岳寺の甲の墓前に献じたのである。

幕府では丙以下の行為は公儀を恐れざるの段、重々不届フトドキであるとして切腹を命じ、1703年2月4日全員が死についた(彼らは主君と同じ泉岳寺に葬られた)。しかし幕府は、浪士の処分と同時に吉良家を取りつぶしたので、結果としては両成敗が実現したのと同じ状態となった。吉良邸に討ち入ったのは47人といわれるが、このとき切腹したのは46人である。彼らは世に赤穂浪士、赤穂四十七士または四十六士などと呼ばれており、この事件は全体として赤穂事件とよびならわされている。

当時の議論では、武士の行動における「義」が重視された。義の逆は「不義」である。主家の名誉のために死を賭けた赤穂浪士の行動は、主君との関係で義であり、その意味で彼らは「義士」と言える。しかし幕府との関係では、彼らは「不義」の主君に殉じる「不義の輩」であるともいえ、それゆえに彼らは切腹の処罰を受けたのである。赤穂浪士の行為の是非をめぐっては、江戸時代の中でもその後長く議論が続いた。

(以上は基本的に『世界大百科事典』(平凡社)の「赤穂浪士」の項目における田原嗣郎氏の解説によっているが、一部の記述を変更・追加した。)